

原爆の図 丸木美術館ニュース



編集・発行 公益財団法人 原爆の図 丸木美術館
〒355-0076 埼玉県東松山市下唐子1401
TEL 0493-22-3266 FAX 0493-24-8371

【郵便振替】00150-3-84303
【原爆の図保存基金(郵便振替)】00260-6-138290
【ウェブサイト】<https://marukigallery.jp>
【E-mail】info@marukigallery.jp



塔 1951年 丸木スマ 墨・彩色、紙 原爆の図丸木美術館蔵

おばあちゃんとわたしは、写生に出かけました。絵の具箱をさげて、二人とも、ちょっと自慢したい心持ちで三滝の山へのぼりました。ピカで焼野原になってしまったひろしまに、きれいな二重の塔が出来たのです。古い塔を運んできて、朱く塗りなおしたのです。ぐるりと回ってみて、少し離れたところに腰をおろしました。(中略)

「あの上の方に丸いもんがあるが、むこうが見えるか」と、いいいます。おや、なんのことかと聞きかえしますと、大きな声で、「丸いものむこうが見えるか」と、いいいます。

「いいえ、見えない」「そうじゃろう、わしにも見えない」丸いもののむこう側は見えない。宝珠の玉のむこうは見えなかつたのです。

(丸木俊「姑の絵・姑のことは」、『丸木スマ画集 花と人と生きものたち』、小学館、一九八四年)

第158号

- 丸木美術館ひろしま忌のお知らせ …… p.2
丸木美術館57周年開館記念日報告 (鍵本 景子) …… p.3
海外に残された丸木俊の作品群(2) 朝鮮民主主義人民共和国での雪舟展と「原爆の図」展、1956年 (北原 恵) …… p.4
日記 (松下 真理子) …… p.6
連載第3回 沖縄同行日記1983 (石塚 美智子) …… p.7
連載第50回 丸木位里・丸木俊の時代 ちひろとの出会い／早朝デッサン会 (岡村 幸宣) …… p.8
丸木俊のスケッチ寄贈報告とロシアの研究者の論考／「業務上横領事件」再発防止策について …… p.10
丸木美術館情報ページ／リレーエッセイ 第90回 (菅家 洋子) …… p.11
写真で見る丸木美術館の日常風景 (山口 和彦) …… p.12

菅亮平 Based on a True Story 7月20日(土)～ 10月14日(月/祝)

丸木美術館 ひろしま忌のお知らせ

原爆投下から七九年目を迎える今年の八月六日。丸木美術館ひろしま忌は、絵本『ひろしまのピカ』朗読と映画『HELLFIRE：劫火ーヒロシマからの旅』の上映会(先着七〇名、参加費一〇〇〇円)を行います。当日は、高校生以下は入館無料となります。

都幾川の河原は草が生い茂り、整備が困難になっているため、今年もとうろう流しを行いません。「原爆の図」の前にとろうを捧げ、黙祷をすることで代わりといたします。

丸木美術館ひろしま忌スケジュール

- 12:00 ~ 14:30 八怪堂 (参加自由・無料)
みんなでとうろうに絵を描こう
- 15:00 ~ 17:00 1階新館ロビー
(先着70名、参加費1000円)
- 15:00 岡崎 弥保『ひろしまのピカ』朗読
- 15:45 映画『HELLFIRE：劫火ーヒロシマからの旅』上映
監督：ジャン・ユンカーマン
1986年、58分
※上映後、監督挨拶あり
- 17:15 ひろしま忌の集い(「原爆の図」展示室)

■ 美術館送迎車

東武東上線森林公園駅南口→丸木美術館

12:00 13:00 14:00

丸木美術館→森林公園駅

11:45 12:45 13:45 イベント終了後

※乗車定員を超える場合、お待ちいただきます。

■ 市内循環バス

東武東上線東松山駅 東口より 4 番乗り場より市内循環バス「唐子コース」約 15 分、「丸木美術館東」で下車し徒歩約 15 分

【バス時刻表】

8:45、10:10、11:10、12:10、14:30、15:35

■ その他の交通

つきのわ駅南口より徒歩 (約 30 分)

森林公園駅よりタクシー (約 10 分)

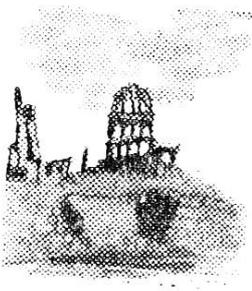
映画『HELLFIRE：劫火ーヒロシマからの旅』は、歴史学者のジョン・ダワーと映画監督のジャン・ユンカーマンが製作し、サンフランシスコ国際映画祭グランプリなどに選ばれた優れた記録映画です。一九八八年には米国アカデミー賞にノミネートされ、位里と俊がマサチューセッツ芸術大学名誉博士号を受けるなど、米国における二人の評価を高める役割を果たしました。撮影は一九八五年に行われ、生前の位里と俊の制作や生活の様子、インタビュートともに、当時の丸木美術館周辺の雰囲気や伝える貴重な映像になっています。日本語と英語どちらにも対応しているのも重要な特徴です。上映後には、

ジャン・ユンカーマン監督による挨拶を予定しています。

また、『ひろしまのピカ』は、一九八〇年に小峰書店から刊行されたロングセラーの絵本で、一八か国の言語で翻訳されています。岡崎弥保さんは、二〇一四年から九年間、井上ひさし作『父と暮らせば』の朗読劇を上演され、現在は『ひろしまのピカ』の朗読に取り組まれています。

八月六日は、たいへんな暑さが予想されます。丸木美術館は空調設備が決して十分ではなく、大勢の人が集まると室温が上がります。くれぐれも暑さ対策を行った上で、ご来館ください。

当日、美術館の前庭は、有機野菜などの出店やフリーマーケットなどで賑わいます。八怪堂では、とうろうに絵を描くワークショップもを行います。ぜひゆっくりと時間を過ごしながら、七九年前の広島を想い、そして現代における平和の重みを再考する一日にしていけたらと思っております。



マンスリーサポーターを募集しています

丸木美術館の運営の安定のために、毎月定額のクレジットカード決済(月々1,000円~10,000円まで選択可)によるマンスリーサポーターを募集しています。2022年のスタートから反響が大きく、丸木美術館の日常の活動にとって大きな支えになっています。寄付は税額控除の対象となります。詳しい情報は下記ウェブサイトまたはQRコードからご確認ください。

<https://www.congrant.com/project/marukigallery/1408>

友の会の会員で今後クレジットカード決済を希望される方は、マンスリーサポーターへの移行をお勧めします。郵便振替をご希望の方は引き続き友の会を継続できます。



丸木美術館五七周年開館記念日報告

鍵本 景子 かぎもとけいこ

満席となった会場

五月五日(日) 原爆の図丸木美術館五七周年開館記念日は快晴でした。阿波根昌鴻さんの写真展にあわせ、この日は沖縄のイベントが行われました。一階のロビーでは、丸



スライドを投影して行われた『おきなわ島のこえ』の朗読

(写真提供：筆者)

木夫妻の絵本『おきなわ島のこえ』(小峰書店刊)の朗読を私がさせていいただき、その後映画『沖繩戦の図全一四部』上映と河邑厚徳監督の舞台挨拶がありました。外の八怪堂では山内若菜さんのワークショップ、美味しそうな出店がならびとても賑やかでした。一階ロビーは沢山の方が溢れて座れない方もいらつしやいました。この日はたくさんのボランティアスタッフがお手伝いをされていました。私は二〇二〇年の沖縄慰霊の日からこのお話を朗読し、この日で一五回目に、普段はA2サイズの紙芝居の形ですが、今回はプロジェクターで投影しての上演となりました。プロジェクター操作は学芸員の岡村幸宣さんをお願いしました。

ドラマでうちなんちゅー(沖縄の人)の役をしたり、叔母が沖縄の

彫刻家金城実さんのマネージャーをしていることもあり、若い時は沖縄へよく通いました。海の青さ、空の広さ、美味しい食べ物、豊かな芸能、いちやりばちよーでの優しい人々に元気をいただいていたました。それと同時にどこまでも続く基地のフェンス、物凄い爆音で低空を過ぎゆく飛行機、そして佐喜真美術館にある『沖繩戦の図』を観て、東京へ帰ると、二つの土地のギャップにモヤモヤする自分がいました。

戦争の体験を引き継ぐ絵本

小学校の絵本読み聞かせグループの選書会で沖縄の子どもの平和の詩に本州の絵描きさんが絵をつけた作品を取り上げたいと伝えると、「子どもが書かされているかもしれないものだから」ということを口にした方がいました。その言葉にとっても驚き、ショックを受けました。しかし、沖縄のことを知らないからそのような言葉が出てくるのだと気づきました。

その後この『おきなわ島のこえ』に出会い、ぜひ伝えたいと思い、著作権継承者の丸木ひさ子さんに繋いでいただきました。

「この絵本は二人の子どもが見たことを順番にたどっているだけだが、

沖縄戦全体を語っている。沖縄の人たちの生活の変化が伝わってくる。すごくよく考えられた話。地面を歩いている二人の子どもの話」「戦争の話であり、人権の話」これは紙芝居を観た方にいただいた言葉です。丸木夫妻が沢山の本を読み、現地の人のお話を聞き様々なエピソードを挿入して地上戦を伝えていきます。しかし観た方は不思議と救いのあるイメージを持って観終わることができると言います。それは丸木夫妻の文と絵の力なのでしょう。

沖縄戦のことを知らない方に伝えたいと思いはじめましたが、自分も知らないことが多いと気づかされました。

戦争を体験していない世代が戦争を引き継いでゆく、その一つにこの絵本を語り伝えてゆることがあると思います。丸木夫妻のようにおおらかさを持つて続けてゆきたいです。

最近子ども時代の読書感想文『ルルの家の絵かきさん』宇佐美承・著(偕成社)が出てきました。そこに「東松山の先生にあって、話だけでもしてみたい。」「ルルの家に行きたいなあ」と一〇歳の私は言っています。丸木ご夫妻にはお会いできませんでしたが、これからも度々丸木美術館を訪れたいと思います。もちろん新館にも!

(俳優)

海外に残された丸木俊の作品群(2) 朝鮮民主主義人民共和国での雪舟展と 「原爆の図」展、1956年

北原恵 きたはらめぐみ

はじめに

前回の連載初回で、「原爆の図」が日本―朝鮮―中国―ソ連―東欧など社会主義圏を旅した歴史について調べると宣言したものの、どこから手を付けてよいか、あれから考えあぐねていた。その間、美術史家でありアーティストのヴィクトル・ベラゼロフ(ベラジューロフ)が、ソ連での丸木夫妻の活動について詳細な論文をネット公開し、当地に残る作品リストを完成させたと知った。国境を越えた丸木俊・位里の移動について調べる時、ベラゼロフの仕事は心強い導き手となるはずだ。では、私は何をすべきか?

そこで、今回は、赤松・丸木夫妻が朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)で、雪舟展開催に関わった一九五六年の北朝鮮訪問の旅を追ってみることにした。なぜなら先日、京都国立博物館で雪舟の影響を振り返る展覧会「雪舟伝説―画

聖(カリスマ)の誕生」を見たとき、気になることを思い出したからだ。一九五六年に北朝鮮で雪舟展と「原爆の図」展が開催されたという記事を以前読み、ずっと不思議に思っていたのである。

なぜ、北朝鮮で雪舟展が開かれたのか? そのとき、赤松・丸木夫妻は何をしていたのだろうか? これまでの研究では、すでに小沢節子が世界巡回展(一九五三〜六四年)の時代背景を的確に指摘している。だが、小沢が「ミッシングリンク」と呼ぶその詳細はまだ明らかになっていない。そこで当時の文献資料などからわかった断片を紹介し、埋めていく作業の一助としたい。

雪舟展と「原爆の図」

雪舟の展覧会が北朝鮮で開催されたのは、一九五六年九月のことである。この年五月に赤松俊子と丸木位里は、「原爆の図」の第四〜一〇部を携えて、世界行脚の旅に出発した。

『労働新聞』1956年9月8日3面
「日本の卓越した画家 雪舟等揚 逝去 450周年を記念」

我が国の美術・科学文化界では、15世紀の日本の卓越した画家、雪舟等揚逝去、450周年を意義深く記念した。

平壤では、6日夕方、モランボン劇場で、雪舟等揚逝去450周年記念の夕べを開き、日本美術史上において水墨画を完成させ、当時の中国の先進美術を摂取して、日本の民族美術の伝統を継承発展させるのに寄与した、写実主義の画家である雪舟の輝ける生涯を意義深く追慕した。

美術家、科学者、作家、教育家や社会団体の人士たちが多数参加したこの会で、朝鮮美術家同盟中央委員会、チョン・グァンチョル[鄭寛徹]委員長は、その報告で日本美術史上に輝く雪舟等揚の生涯と彼の傑出した作品を取り上げて、彼の写実性と芸術性について詳細に言及した。

この会に招待された来朝中の日本の画家の丸木位里は、雪舟の生涯と彼の芸術について詳しく述べた。

この日の会合では、平壤に滞在中である日本の画家の赤松俊子が、日朝協会と日本平和擁護委員会の活動家たちと、我が国を訪問していた日本の各人士が贈ってきた雪舟に関する映画フィルムを朝鮮平和擁護全国民族委員会チョン・ロシク副委員長に伝達した。

この夜の集まりに参加した人士たちは、雪舟に関する映画と国立芸術劇場で歌劇〈ソルゲ谷の人びと〉²⁾を鑑賞した。【朝鮮中央通信】

(注・日本語訳: 北原恵)

1) 鄭寛徹(1916-1983年)は、東京美術学校(油絵専攻)を卒業し、解放後、北朝鮮の美術界をリードした画家。

2) 〈ソルゲ谷の人びと 솔개골 사람들〉は、女性作曲家・文慶玉(1920-1979年)による1956年の歌劇。

出発前、位里は飛行機に乗るのも外国に行くのも初めてだと、その緊張を語っている。実はこの年、一月に位里の母・丸木スマが留守宅で殺され、急遽帰国を余儀なくされることになるのだが、このときはまだ想像すらしていなかった。

二人はまず中国を訪問した。それまで巡回して傷んだ「原爆の図」を中国側が表装してくれるのを待ち、北京で八月に開催された「原爆の図」展と雪舟展の開幕式に参加し

た。これらの動きに合わせて、雪舟の立派な画集までが北京の人民美術出版社から出版されている。

中国の次に夫妻が訪れたのが、北朝鮮である。

八月三二日夜、夫妻は汽車で平壤に到着した。そして九月二〇日朝、平壤を出発するまで、三週間余りを北朝鮮で過ごす。その間二人は、雪舟展と「原爆の図」展の開幕式に立ち合い、北朝鮮国内を旅して多くの絵を描いている。



平壤の「原爆の図」展（1956年9月）会場で説明する赤松俊子と丸木位里

当時の『労働新聞』や平壤放送では、何度も夫妻の動向を伝えた。まず、目につくのは雪舟展の方である。政権を担う朝鮮労働党中央委員会の公式機関紙『労働新聞』では、八月二四日、朝鮮平和擁護全国民族委員会が日朝協会と日本平和擁護委員会に対して、雪舟に関する資料を送ってくれたことに対する謝意を伝えたことが報道され、その後開幕の様子や雪舟について記事が出た。記事によれば、雪舟等楊逝去四五〇周年を記念するこの展覧会は、九月六日に平壤のモランボン劇場での「記念の夕べ」で幕を開けた。このとき招かれた丸木位里は、雪舟の生涯と芸術について詳しく紹介して



1956年に発行されたルーマニアの切手（左）と、藤田美術館所蔵の雪舟の自画像の模本（16世紀）。

いる（参考のため、『労働新聞』一九五六年九月八日号の同記事を訳出した）。翌九月七日から始まった雪舟展には、日本から送られた写真七〇点が展示された、と新聞は伝えている。さらに九月八日には、雪舟について詳しい解説も掲載された。その中で、雪舟の山水図に「朝鮮人の李孫と朴衡文が賛を書いた」事実を取り上げ、「雪舟は当時書画が発展していた朝鮮人の評価も受けたということだ」と締めくくっている。⁴

雪舟等楊の逝去四五〇周年を記念する展覧会は、一九五六年に、北京（八月）・平壤（九月）・モスクワ（〇月）をまわったが、どの会場でも展示されたのは、日本から事前に送

世界の「民衆画家」としての雪舟

られた写真による複製画や資料である。この雪舟展には、山口蓬春が中国から招待され、団長として訪中したが、次の開催地の北朝鮮には行かず、丸木位里たちに任せようだ。しかし不思議なのは、なぜこの時期に、わざわざ複製を展示してまで、開催する必要があったのだろうか？なぜ、雪舟なのか？

実は、この雪舟展の前年、一九五五年にウィーンの世界平和評議会で、雪舟が「世界十大文化人」のひとつに選ばれ、ちよつとした雪舟ブームが起きていたのである。一九五六年に、東京や京都の国立博物館で雪舟展が開かれただけではない。同年、ソ連やルーマニアでは、ほかに「世界十大文化人」として選ばれたモーツァルト、ハイネ、ドストエフスキーらと並び、雪舟の自画像が記念切手にもなっている。雪舟のこの切手は、「個人名が特定できるかたちで日本人が外国の切手に取り上げられた最初の例」（内藤陽介）だそうだ。切手に使われている雪舟の自画像の画像も見てみよう。元になった絵は藤田美術館が所蔵する一六世紀頃に描かれたとされる模本（原本を写した模写）であり、原本は雪舟が七

一歳の冬に描いた自画像だという。わざわざ烏紗帽（くさぼう）という中国の帽子を被った自分の姿を描いたのは、四十年代で中国に留学した経歴を示すためだったとされている。

つまり、冷戦期に東側諸国政府の主導で設立された世界平和評議会で「世界十大文化人」の一人に選ばれた雪舟は、国家間の友好を進めるうえでの露払いのような役割も担わされたのではないだろうか。

中国では、あえて中国で学んだ経歴を強調することによって、中国との友好をアピールするために雪舟の名は使われ、その中国の友として、また、「民衆の画家」「写実主義の画家」として、その後同じ社会主義圏の北朝鮮やソ連をまわったと考えられるのである。日本の文化人たちもそのメリットを十分に理解していた。

たとえば、日本美術会の発行する機関誌『美術運動』には、モスクワでの雪舟四五〇年記念行事の様子を写真入りで伝えているが、記念祭の壇上の壁に大きく掲げられたのが、烏紗帽を被った雪舟の自画像の複製だった。⁵

そして北朝鮮では、雪舟展とほぼ同時期に、続いて「原爆の図」展も開催されることになる。

（美術史研究者）

【続】

3) 雪舟没後450年という数字は、1506年没説に基づく。 4) 「15세기 일본의 탁월한 화가 세슈(15世紀 日本の卓越した画家 雪舟)」『労働新聞』1956年9月8日4面。 5) 「モスクワで開かれた雪舟450年記念行事」『美術運動』1957年1月25日号（日本アンデパンダン10周年特集号）日本美術会、1頁。

日記

この数ヶ月のあいだ、
 ますますことばがとおくなつて、
 ばらばらになつて、
 ひとにわかるようつなぎあわせるのに、
 ちからがいる

のどが鳴ると、
 あたまにひびく
 にほんご
 それが、くちからでる
 にほんご

くちのなかに、国境がある
 有刺鉄線がある
 地雷原がある
 分離壁がある

道路に穴がぼこぼこあいているように
 感じたり

足もとがスツとなくなつて
 落ちるように感じたり
 自分のからだにも

そのあな、空隙が転移してきて
 ばらばらな、
 つぎはぎだらけの街を、
 じぶんじしんを、
 なんとか操業していかなきゃいけない

いまでは裂けめのなかに
 にんげんの顔だけではなく
 無数の動物たちの、
 毛や、あし、ちいさな眼が

ぎゆうぎゆうに詰めこまれているよう
 で

ただ日常をすることに
 おおきな乖離を感じる

動物を食べなくなり
 たまごや牛乳
 さかなも食べなくなった

まいにち、まいあさ、
 引きちぎれたばかりのぶらぶらの手足
 や、
 意識のない、

頭がぼつかりと穴になつてしまった子
 ども、
 黒いぼろ切れのような塊

そして言葉につくせないほど
 ずたずたにされ、黙つて、いる、
 うま、ろば、いぬ、ねこ、とり

それらをみつづけながら、どうやって

……

私は「小さいわたし」といつしよに
 意識の底へむかう
 以前は知らなかった「こわいもの」も
 いる

地下の、
 つちの空洞、
 つちのかいだん、
 なまえない場所へでる



「松下真理子 人間動物」は2024年5月11日～7月7日の会期で開催されました

非人間化による圧倒的な暴力

常態化している女性蔑視
 性暴力

動物のいのちを極限まで利益化する
 虐待

これらの腐敗と混濁を
 私は、ありとあらゆるところに感じる

もしわたしに尾があれば……
 もしわたしに角があれば……
 もしわたしに翼があれば……

ちゅうにういたような高さ
 不条理なちいささ

ちようどそれそっくりなドアが
 私の作業場所にもある

時間になると

にんげんが
 私を移動させにくる

いまでは私が
 それに「なつて」いる
 私はその場所をみて
 ひろい場所の
 ごくいち部分をつたえようとし
 とてもとてもながい時間のうち
 ただ一瞬のことを
 つたえようとしている

……

二〇二四年七月三日
 松下真理子

連載第3回 沖繩同行日記 1983

石塚 美智子 いしづかみちこ

曇
一月三日(日)

八時頃出て教会に寄つて、伝言と差し入れの御礼を言う。

砂田明さんが明日来るといふ。楽しい機会になりそう。

(隣のぼうやが昨日入院したといふ。腎炎とか——)

佐敷から百名に抜けたら早く行って、一〇分前位には、ひめゆりの塔へ着く。すぐ皆さん四名も来て下さり、一緒にひめゆりの塔でお参りし、喜屋武へ行く(荒崎)。あちこち曲り、これではとても地図だけでは、わからなかつたと思う。

ガタガタ道。両脇から銀ネムが繁つ



ひめゆりの塔 丸木俊 1978.9.26

て道中いっぱい。車を止めて海辺へ。

それからサンゴ礁の中にわずかにコンクリートで道を付けた所を歩いて、自決の地へ行く。「ここで隠れていたんです」「機動掃銃で無差別に撃ってきたんです」といふ話。すごい話。海からの風が冷たいが、花を

捧げ、線香をあげ、捧げ物をしてそこでしばらく話す。捧げた物をお下げしていただく。油味噌の入ったおにぎりとお茶、タンカン、おいしかった。俊先生は描く。「みんなも描きましょう」といふ話をして署名する。早かつたが、寒いので引き揚げる。

一二時半頃には嘉数に着いたので、先に三輪さんのお宅にお寄りする。温かく迎えて下さる。

二時に大田昌秀先生宅にお邪魔。体験談などはあまり聞かず(私は聞きかたかつたが)、専ら子ども向けの本の話。事実には副読本的なものを作りたいという。那覇出版から、そういう話があるという。

四時頃また三輪さん宅にもどる。俊先生二月一日に帰ることになり、三輪さん宅でお世話になることにす

る。二九日に一緒に来て、私は翌朝早く船に乗ることにする。アシテビチ作る。

石塚さんによれば、広島の被爆者が「原爆の絵」を描いたように、ひめゆりの方々にも体験を描くよう提案し、描く約束として何かに署名したのではないかとのこと。

午前中、沖繩で最後の共同制作。一時二〇分頃出て、上江洲さん宅へ画集を受取りに行く。なかなかわからず、やっと教えてもらったが、入口がいっぱいあつて玄関がわからないで迷う。秘書の方が待っていて下さる。沖繩タイムスと琉球新聞の新聞も、取ってきて下さっていた。

それから琉球新報へ挨拶に行く。三時には市役所へ。市役所脇の道路を工事しているのと、何やらの手続きの日で混んでいて、ずっと渋滞していた。平良市長さんと会い、市史をいただき、三〇分話をする。三輪夫人と一緒に下さる。

それから沖繩タイムスへ。挨拶して本を置いて、あまり長居せずもどる。砂田明さんとちようどお会いする。

買った物してもどつてくると、平良先生がいらした、とのこと。電話するとのことに進めるかの打合せ。

食事して七時に教会へ行くが、人数少ないので、もう少し待つことにする。教会から頼まれた色紙を二枚描く。

曇
一月四日(月)
曇/晴 夜雨

七時二〇分頃より始める。後ろの方に座っている人々に向つて平良先生は「後ろではお二人のシワが見えませぬ。このシワは原爆を見てきたしわです。どうぞ前に来て、シワを見て下さい」とおっしゃる。

位里先生が先にちよつと話して、その後、俊先生の話一時間。子供も来ていたがおとなしく、良く聞いていた。その後発言をしてもらう。

九時半過ぎに終わりになったが、最後にカンパを呼びかけて下さり袋をまわす。四九、六八四円、一〇二名の方が名前を書かれた。

砂田さんが一言、挨拶される。一〇時頃戻つてくると、祖慶さんと新垣さんが来ている。

先生方はすぐ休む。一二時すぎ、新垣さんは、雨が降っていたので泊るように言うが帰つていった。祖慶さんは泊る。

【続】

(文字入力・大塚未希、石塚さんのメモや聞き取りをもとに岡村幸直が補記)

連載 丸木位里・丸木俊の時代 〈第五〇回〉

焼け野原の東京で、位里と俊の新しい生活がはじまる。
長野県の松本から上京してきた若い画家は、
のちに絵本作家として知られることになる岩崎知弘だった。
早朝のデッサン会では、参加者が順番に裸になってモデルをつとめた。

ちひろとの出会い

敗戦後の自身の活動について、俊は次のような回想をしている。

東京へ帰ってガタガタ、ガタガタ民主化じゃなんじゃ、米よこせの運動があつて、宮城へ米よこせのデモには私も行きました。三木清や戸坂潤の肖像画を描いて、あの時代の人を顕彰するとか、共産党ができたあとは早速入ろうだとか、入ったら細胞をつくろうだとか忙しくやりました。

私は魚屋をやつて党员を増やすことにして、なにもない時代だから魚をとりよせて売って歩くわけ、人には親切にしているそのうちに党员になつてもらうだとか、そんなことをやりました。なかにはパン屋さんをはじめめるものもいるし、魚屋なんかはそのうちにほんもの魚屋ができてね、私らの魚はず

ぐ生きが悪くなるから買つてくれんようになりました。それでも私は豊島区におつて細胞をつくつて、それが分れて四つくらい細胞になつたんですよ。それがみんな絵描き細胞でどんどん増えていったんです。そのうちいろんな問題が起つてきましたけどね。

(丸木俊 座談「今更と言われつづけて」、『日中』一九七五年一月)

「米よこせの運動」というのは、深刻な食糧難のため一九四六年五月九日に皇居（宮城）前に約二五万人が集つた食糧メーデー（飯米獲得人民大会）のこと。また、三木清の肖像画とは、『丸木美術館ニュース』第一四八号で紹介した、位里の《馬（群馬）》の一部に上書きした肖像画を指すのだろう。

この頃、豊島区南長崎のアトリエ村「さくらが丘パルテノン」の位里と俊の家を訪ねて来た岩崎知弘（いわさきちひろ）との出会いもあった。



いわさきちひろがモデルとなった裸体デッサン。上が俊、下が位里の作で、ともに1947年10月2日の日付が記されている。

ちひろが日本共産党宣伝部・芸術学校の入学式に出席するため、宿のあてもないまま疎開先の長野県松本市から上京してきたのは一九四六年五月二日。後にちひろの夫となった松本善明は、「上京後の最初の一泊がどこだったかということまでは、聞いていませんが、江森盛弥さんに世話になったこと、赤松俊子（丸木俊）さんのところで世話になったことは、ちひろも話していたことで間違ひありません」（『妻ちひろの素顔』、講談社、二〇〇〇年）と回想している。江森盛弥は『人民新聞』の編集長だった。ちひろは新聞の募集広告を見て上京して最初に人民新聞社を訪ね、江森は自宅に連れ帰ったが、食糧難のため妻に断られ、近所に住

んでいた俊のもとへ連れて行った可能性が高いと、飯沢匡（黒柳徹子＋飯沢匡）「つば広の帽子をかぶつて」、講談社、一九八九年）や平山知子（若きちひろへの旅（下））、新日本出版社、二〇〇二年）は推測している。もっとも、飯沢は当時の食糧事情から、人を家に泊めることはとても信じられないと考え、生前の俊に会つて話を聞いている。

「あのころの家の食糧は、——わたしが朝早く起きてパルテノンの道を歩くの。すると、道ばたにはえているヒメジヨオン（姫女苑）をナイフで取つてくるの。それをクタクタにゆでて、すり鉢でつぶして、メリケン粉と水溶きしたものを、フライパンに油をほんの少し塗って焼くの。

私のジメジョオンのドンドン焼きの発明で、一人や二人ふえても、なんとか食べさせられたわ」(『つば広の帽子をかぶって』)

俊の大きな回想からは、片瀬や練馬、東松山と移り住みながら常に人を迎える場として自宅を開いていく姿勢が想起される。実際に、ちひろがどのように世話になったのか正確には不明だが、その後、ちひろは人民新聞社に記者として就職し、夜は芸術学校で学びながら、俊のア

トリエに頻繁に出入りする。そして一般的な師と弟子という関係を越えて、親しく交流していくのだった。

早朝デッサン会

一九四六年九月二〇日付『人民新聞』には、執筆者は不明だが「紙上畫展」という記事が掲載されている。そこには「アカマツ・トシコさんのアトリエで、働く青年たち五人が、毎朝六時半から八時まで、つとめにできるまへのわずかな時間を利用して、繪をかいてみる。このにかけた人物のスケッチはその一人であるスズキ・シンイチ君の作品
○はじめに繪をかく人というものが、どんなに素晴らしい



「紙上畫展」『人民新聞』1946年9月20日 絵のモデルは位里と思われる

つとめにできるまへのわずかな時間を利用して、繪をかいている」とデッサン会の様子が紹介されている。デッサン会には、ちひろをはじめ、北添(三輪)寛子、島田澄也ら画家志望の若者や「働く青年たち」が集まっていた。俊はかつて熊谷守一のデッサン会に参加していたから、戦後の新たな出発とともに、みずから会を主宰しようという発想は自然に生まれたのだろうし、市川市の小学校教員時代に生活綴り方運動や自由画教育に触れていたのも、自分たちの生活を観察して社会の実態を認識し、変革の糧にしているために表現の力を養うという思いもあっただろう。「素人

は、対象をイロイロな技法でわざわざいざれずにみるため、専門家がナカナカできない新鮮なすどいカンカクを、ポンと描きだしてしまう、手紙がだれにでもかけるように、絵はもつとすばらしくだれにでもかける」という記事の文面からは、この頃から俊が唱えていく大衆芸術論の息吹が感じられる。

デッサン会については、参加者のひとりだった三輪寛子が後に詳しく回想している。「毎朝、集まった人が交替でコスチュームのモデルになり、一五分、コンテや鉛筆がカサカサ紙の上を走る音は、描いている今の充実と未来への希望にピカピカでした」「夏が来ました。デッサン会には裸を描こうということになり、知り合った仲間同士ではあっても裸のモデルをするのはショックでした。みんな裸は描きたい、しかし自分が裸になるのは、動揺していると俊さんが『モデル一人で裸になるのは恥ずかしいから描く人もみな裸になってデッサンしよう』といわれ、みんな風呂屋で絵を描いているような格好なのに肅々と描きました」「ちひろさんがモデルをするときは、後ろ向きになったり、足を手で抱いて丸い固まりのようなポーズが多かったのを……思い出しています」(平山知子『若きちひろへの旅(下)』)。

丸木美術館に現存する裸体デッサン(のちに「原爆の図」のもとになり、「原爆の図のためのデッサン」と呼ばれている習作群)には、ちひろをモデルにした位里と俊のデッサンも残されている。どちらも一九四七年一月二日という日付で、描かれた人物のポーズも同じものだ。ちひろの息子の松本猛は「俊さんが先頭きつて裸になり、さあ描きなさい、と。みんなで順番に必ず洋服を脱いでデッサンをするわけですから、母もどうしても脱がざるを得なくなつて脱いだという話を聞いております」(丸木美術館ブックレット3『丸木俊さんを偲ぶ会全記録』、二〇〇〇年)と語っているが、裸身を少しでも隠すように控えめにポーズをとる、内気なちひろの精いっぱい覚悟が伝わってくるようなデッサンである。

また、ちひろ美術館にも、俊をモデルにちひろが描いた一九四六年と一九四七年八月二三日の日付の入ったデッサンや、一九四六年六月二五日作の《ヒゲづらの男》、一九四七年作の《編笠の男》(どちらも位里がモデルと思われる)と題するデッサンが現存している。当時のちひろの力強い線描は、後年の絵本のイメージとは異なり、むしろ俊の描くデッサンによく似ている。

【続】

(岡村幸宣・丸木美術館学芸員)

丸木俊のスケッチ寄贈報告と
ロシアの研究者の論考

新潟市在住の佐藤宏さんより、丸木俊（赤松俊子）のスケッチ七点をご寄贈いただきました。保存状態は極めて良好です。長野にお住まいだった佐藤さんのご両親が、俊や位里と親交があったとのことでした。

そのうち五点は人形劇や演劇の舞台公演を描いたスケッチで、一九四一年一月から六月にかけて、駐ソ公使・西春彦の娘の家庭教師としてモスクワへ赴任した際に描かれたものでしょう。また、白樺林を描いた風景画も同時期のモスクワ郊外のスケッチと思われます。「一九五〇年メーデー」と記されたスケッチには、「戦争反対」の旗も見え、朝鮮戦争開戦に抵抗する人びとの行進の緊迫した様子が伝わってきます。

* * *

ロシアの美術史研究者の Виктор Белозёров [Viktor Belozerov] による、丸木位里と丸木俊のソ連・ロシアとの交流や、「原爆の図」などの作品の受容の歴史を調査した論考 Здравствуй, дорога! с ранами - Маруки в СССР и России [Hello, dear country! - the Marukis in the USSR

and Russia] がインターネットに公開されました。

<https://syg.ma/@gendaiye/893JqNBmHYJ0g>

俊は一九三七〜三八年と一九四一年の二度にわたって外交官の子どもの家庭教師としてモスクワに赴任していますが、それは当時のソ連側の記録には登場しません。

一九五三年には日本の女性代表団の一員としてソ連各地を視察し、一九五六年には位里とともに「原爆の図」展開催のためにモスクワに招かれています。今回の論考は一九五〇年代以降のソ連メディアにおける位里と俊の報道を中心に、「原爆の図」の展覧会の動向や、ソ連国内に現存する位里と俊の作品、そしてソ連の芸術家たちによる位里と俊のイメージの表象を詳しくまとめています。

これまで『丸木美術館ニュース』に寄稿されてきた北原恵さんや関町卓朗さんの論考も含めて、今後は「原爆の図」をはじめとする位里と俊の芸術の国際的な展開が、いかに各地の人びとに受容され、反核運動などの歴史に影響を与えていったのかという調査研究が重要になっていくことでしょう。丸木美術館としても資料の整理と公開に尽力していきたいと考えています。

(岡村幸宣・丸木美術館学芸員)

「業務上横領事件」再発防止策
について

昨年発覚した元職員（懲戒解雇）

が犯した業務上横領事件により、関係者の皆様、また弊館の活動に関心を寄せて下さっている多くの皆様にご迷惑とご心配をおかけいたしましたことを改めてお詫び申し上げます。事実の詳細は弊館HPの記載に委ねたいと存じますが、監事といたしましては、喫緊の課題は二度とかかる不祥事を起こさせない、適切かつ確実な法人ガバナンス体制を監事が主導して確立していくことであると認識しており、法人外からもそうしたご指摘を頂戴したところです。そのため、以下のことを実施します。

1. 長期にわたり同一人が職務に従事してきたこともあって、これまで慣行的に行われてきた業務遂行の諸規則を明文化し、決定権限の明確化と金銭出納における複数チェック体制を確立する。
- ・金銭出納管理規程・助成金等外部導入資金取扱規程・寄付金等取扱規程の制定（二四年三月）
- ・社会保険労務士の協力を得つつ、労働関係・職務秩序関係の規則の必要な明文化（二四年六月）
- ・その他、業務運営上必要な諸規程

の明文化（二四年秋ごろ）

2. 監事の権能は理事会機能・権限から独立して行使されるという事は、公益法人制度の立て付けとして自明であり、且つそれは強化される方向にあることを認識し、自律した法人ガバナンスを実現するための担保規程を整備する。

・監事監査規程・監事行動指針の制定（二四年六月）

・上記規程・指針に基づき、諸会議や日常運営における監査の視点からの随時チェック（二四年六月）

・当面、定例監査を四半期単位で実施（二四年七月）

3. 当法人は財政上甚だ少人数で運営に当たらざるを得ないという宿命にあり、理事・監事・職員のマンパワーは極めて限られているため、理想論的な体制構築は現実的には一定の困難がある。そのため、制定される規程類や役員行動指針等は、プライバシー保護等人権との衝突がある問題を除き基本的に公開して、ご批判をお受けしつつ共に考えていきたいと存じます。

以上、恐縮ですが紙面の制約があり、具体的な規程等の本文は、勝手ながら弊館HPの該当箇所をご参照ください。今後ともなにとぞよろしくお願い申し上げます。

(浜地稔・丸木美術館監事)

Relay Essay

リレー・エッセイ Vol.90

菅家 洋子

ともびそう
燈日草



広島県の生まれで、福島県昭和村に移住して16年になります。かすみ草や様々な草花を栽培する農家として働きながら、古い木造校舎を利用した村の施設「喰丸小」で、月に数回「燈日草」という出店本屋を開いています。「燈日草」の活動を始めた2021年から、毎年夏に「喰丸小」で「ヒロシマ展」を開いてきました。これまでは広島平和記念資料館の資料を利用させていただいたのですが、4回目になる今年は丸木美術館から「原爆の図」原寸大複製画をお借りして展示をしました。

20年前、沖縄の佐喜眞美術館で「沖縄戦の図」を観たことから丸木夫妻の存在を知り、それから時を経て、昨年『ピカドン』復刻版が発刊されることを知って、地元新聞に紹介文を書いたことでまた距離が近くなり、今年1月に初めて丸木美術館を訪問することが出来ました。丸木夫妻が遺して下さったものの大きさを改めて感じ、この大切な美術館をみんなで守っていかなくてはと強く思いました。そして今年の「ヒロシマ展」ではぜひ「原爆の図」を、パレスチナでたくさん子どもたちが犠牲になっていることに想いを馳せてもらうためにも、画の中心に傷ついた母子像の描かれた第3部《水》を展示することに決めました。

6月18日から24日まで一週間の「ヒロシマ展」、足を運んで下さった方と画の前で色々なお話をしました。この画の前だから話せたこと、思い起こされたことがたくさんあったと思います。つらくかない画、けれどそこに宿る丸木夫妻の、原爆で亡くなった人々の祈りの想いが、観る人の心をとらえ、また祈りを呼び起こすのだと感じました。「ヒロシマ展」を続けていくなかで、また「原爆の図」を展示する機会を持ちたいと思っています。



丸木美術館 情報ページ

館外イベント

川越市「平和を考える集い」
広島平和記念式典中学生派遣事業
体験発表会と講演会

八月二七日(土) 午後二時半

川越市立博物館視聴覚ホール

(川越市郭町)

講演：岡村幸宣(丸木美術館学芸員)

問合せ 川越市総務課

〇四九(二二四)五五五〇

新刊書籍

『戦争ミュージアム―記憶の回路をつなぐ』
梯久美子・著

定価九二〇円十税

岩波新書

戦争の時代を生きた人間を描く

ノンフィクションを多数発表してきた作家が、各地の平和のための博物館を訪ね、土地の歴史と人びとの語り伝える。丸木美術館も紹介。

『ドキュメント』『沖縄戦の図』全14部
丸木位里と丸木俊が描いた(い)のちのの叙事詩』
河邑厚徳・著

定価二三〇〇円十税

岩波書店

映画『丸木位里 丸木俊 沖縄戦の図 全14部』の監督である著者が、制作の課程で思考し、苦悩したプロセスをまとめた一冊。

原爆の図保存基金報告

原爆の図保存基金は、二〇二四年六月三〇日現在、八四八八件の方々にご協力いただき、三億二八八万六九八円となっております。

現在、美術館建物の改修に向けて、施工費の調整に入っていますが、エレベーターの設置や耐震、断熱性能の向上のためには、さらに多くの資金が必要となりそうです。建物の調査が進むにつれて、これまでの増築がいかに無理を重ね、結果として課題が先送りにされてきたかと痛感します。今回の改修工事で少しでも解消できるよう、引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

【郵便振替】

名称：原爆の図保存基金

番号記号：00260-6-138290

※他金融機関からのお振込の場合(別途メールでご連絡先を通知ください)

名称：原爆の図保存基金

店番：〇二九(ゼロニキュウ)店(029)

預金種目：当座

口座番号：0138290

ドナーウォールプロジェクトも募
集しています。



原爆の図保存基金



ドナーウォール
プロジェクト

写真で見る

丸木美術館の日常風景

(撮影・編集：山口和彦)



5月9日 ニュージーランドの芸術家ロビン・スミスさん(右から3人目)と映画撮影スタッフが来館



5月5日 開館記念日の横断幕を張るボランティアスタッフ (撮影：丸木伸里)



4月20日 阿波根昌鴻展トークイベントに出演された玉城睦子さん、比嘉豊光さん、小原真史さん (撮影：丸木伸里)



6月25日 東京・江戸川区の被爆者団体「親江会」のみなさんが来館



6月12日 原爆の図《米兵捕虜の死》のモデルを務めたジーン・イングリスさん(左)と丸木ひさ子さん

編集後記

▼美術館のまわりでセミが元気に鳴き始めたと思っていたら何処からかウグイスの声。セミとウグイスが同じ時期に鳴くというのは意外な感じがしましたが、ネットで調べてみたら夏にウグイスの声が聴けるというのも珍しくはないようです。(山)

▼マンスリーサポーター制度をご存じでしょうか。丸木美術館の運営維持を支えるご支援でクレジット決済です。月々の決済となりますが、友の会更新のお手続きが面倒な方など検討していただければ幸いです。(実)

▼東京国立近代美術館の企画展「TRIO パリ・東京・大阪 モダンアート・コレクション」で、丸木俊(赤松俊子)の二九四七年作の自画像が、恩地孝四郎とシャイム・ステインの自画像とともに展示されています。二〇一九年に東京国立近代美術館のコレクションとなった油彩画です。三つの都市の近代美術館のコレクションがテーマに即して並ぶ機会をお見逃しなく。会期は八月二五日まで。

▼昨秋から続くガザの虐殺への応答となつた松下真理子さんの展示。窓から差し込む自然光のみの空間で、毎日のように若い世代が熱心に作品と向き合う光景に心を打たれました。言葉を発しない筆談のみのイベントも、静謐な時間を共有する大切さを考えさせられるものでした。(岡)